

遺品整理の現場から見える、若者の「ひとり」化

煩わしさや不便に耐え切れず自分に都合のよい生き方を選択すると、人間関係や協調性の大切さに気付かなくなってしまう……。これによつて若者の未婚者の増加に拍車がかかっているのも事実です。

日本初の遺品整理専門会社

わたしの創業した日本初の遺品整理専門会社では、今までに全国で一万五〇〇〇件以上の遺品整理のお手伝いを行つてきました。ご依頼のほとんどが、田舎から遠く離れた都会で暮らしていた「ひとり」住まいの身内を亡くしたご遺族や、「ひとり」住まいとなつた親を亡くしたお子さんからです。

家制度の崩壊によつて核家族化が進み、同居から別居する世帯が増加し、家財道具が共有の財産から専有の財産になりました。その結果、遺品の片づけのお手伝いを必要とする方が増加したことによつて遺品整理サービスが誕生することとなつたのです。また、ひとり住まいを長く続けることによつて、徐々に人間関係が減少し、社会から孤立してしまい孤立死という悲しい最期を迎えてしまう人も多く、社会問題となつております。

“幸せ”の価値観の変化

「おひとりさま、独居老人、単身世帯、未婚者、シングル、孤立者、無縁社会」など、現在の日本社会にはこのような“個”を表すための言葉が飛び交い、とてもさびしい国になつてしまつたようにも感じます。

家制度が定着していた数十年前までは、「ひとり」は、あまりよくないことで成人になれば結婚して家族を持ち、長男は実家で親と同居して後継ぎとなり、“家”を守ることが、日本人としての模範的な生き方であると誰もが信じていて、その模範的な生き方から外れた生き方はほめられるべきではないという考え方

方が一般的でした。

しかし、戦後、日本経済が発展し自由と便利さを求めてさまざまな物やサービスが開発され、いくと、“幸せ”の価値観の変化が起きた。人々は、このように、自分の生活スタイルに対する不満と解放から生まれたものなのだと考えるべきではないでしょうか。

高齢者問題の陰で進む若者の孤立

超高齢化社会の日本では、社会問題として独居老人の増加と孤立化が注目されており、社会福祉事業が高齢者のためにのみあるかの



キーパーズ有限会社代表取締役
吉田太一
よしだ・たいいち
1964年大阪府出身。独自の立場から孤立化する社会問題を捉え講演活動を行う。『遺品整理屋は見た!』扶桑社など著書多数。日本ペンクラブ会員。

ようになります。

たしかに六五歳以上の高齢者人口は三一八六万人（総務省統計局「推計人口」・二〇一三年九月一五日現在）で過去最多となり、総人口に占める割合は二五・〇%と過去最高で、四人に一人が高齢者であり、今後ますます高齢者に対する対策が問題となることは間違ひありません。

しかし、その高齢者問題の陰で若者の孤立化がものすごい勢いで進行していることにも注目し早急に対策を立てないと、約三〇年後の高齢者問題が落ち着き出したことには、恐ろしい時代になつていることが想定されるのです。若者の孤立化が進むとひとり住まいの未婚者が増加することになり、将来まったく家族のない「ひとり」の割合がいまよりも高まることになるわけです。このように身内という歯止めが掛かっていない单身者の増加は、社会の安心と安全に対しても脅威となるかもしれないのです。

わたしは、若者には協調性や人間関係の大切さへの認識が薄く、個を重視し和を重んじない傾向が徐々に強くなつてきてることに危機感を感じています。

接点がなくとも問題なく……

そもそも人間関係を良好に維持するためには、自己中心的な考えではなくお互いの思い

やりや譲り合いは不可欠なものです。

しかし、高度成長期の日本がつくってきた社会はこのような考えに矛盾したものでした。人口の急増によって、団地が開発され、その後ワンルームマンションなどの登場に至り、近所づきあいの必要性の薄い住宅が増加してきたのです。このことによつて同じ建物に住みながら、自宅の隣の住人と全く会話をしたことがないという若者たちが増えてしまいました。

家賃さえ支払つていれば、そのマンションの住人の誰とも接点がなくとも問題なく生きていいくことが出来るようになつたのです。また、コンビニエンスストアの登場や、持ち帰り弁当などの中食産業の発展によつて、ほとんどの誰とも会話をせずに簡単に食事にあります。このようにもなりました。そして、テレビ、ビデオ、パソコン、スマートフォンのような画面を見ながら暮らすという生活スタイルになつてきたことによつて、ひとりで住み、ひとりで食事をとり、ひとりで時間を過ごす、誰からも干渉されることのない、自分中心の快適な生活が簡単に手に入るようになり、人間関係の希薄な若者が増加してしまつたというわけです。

さらに、画面を見ながら行うゲームばかりをして、ひとり遊び中毒となつてしまつている若者が増加していることは、たいへん大き

な問題となつており、この影響は幼児までに及んでいるのです。

ネットやゲームに依存してしまい、生活時間の多くをそこに費やしてしまうと、外出する頻度が減つてしまつます。外出する頻度が減つてしまつと、人と接触する機会が少なくなると同時に、自分の生活スタイルと他人との比較をする機会がなくなります。

若者「ひとり」の実態

ひとり住まいの若者の部屋で問題となり増えているのが、ゴミマンションやゴミアパートの増加です。部屋にゴミが散乱しているので、友人や知人を自分の部屋に招くことができません。また、逆に人が来ないので片づけない、片づけないからまたゴミが増えてしまうという、負のスパイラルに陥つている若者が多いのです。

ゴミマンションやゴミアパートは、ゴミ屋敷とは違い、ドアを開けなければ気づかれないので、友人や知人を自分の部屋に招くことができません。また、逆に人が来ないので片づけない、片づけないからまたゴミが増えてしまうという、負のスパイラルに陥つている若者が多いのです。

ゴミマンションやゴミアパートは、ゴミ屋敷とは違い、ドアを開けなければ気づかれないので、友人や知人を自分の部屋に招くことができません。また、逆に人が来ないので片づけない、片づけないからまたゴミが増えてしまうという、負のスパイラルに陥つている若者が多いのです。

たく見えず、一五〇センチの高さにまでゴミを積み上げて、そのゴミの上で暮らしているなどというケースも珍しい話ではないのです。ゴミのなかはコンセントがタコ足配線となつており、いつ火事になつてもおかしくないような状況です。

また、数十年前はビデオテープが数百本も積み上げられていた室内が目立っていましたが、最近はパソコンの普及によつて、一〇数台以上のパソコンを所有していたり、DVDやハードディスクが大量に残されていりする部屋も多く、数百単位の動画を保存している人もいるのは驚きます。このような動画を見るだけでも実際に何年もかかる訳ですから、外出して誰かと会う時間なんてつくる暇もないだらうと想像されます。考えようによつてはパソコンが凶器のような存在になつてゐるといつてもいい過ぎではあります。ひとり住まいの場合は、このよ



▲写真提供：キーパーズ有限会社

注意してくれる存在がないので、一度そこまで陥つてしまつた若者はどんどん引きこもつてしまうのです。さらに、大学や高校を卒業してから、ほとんど就職もせず親の世話をになりながら自立せず、自宅に引きこもつているパラサイトシングルといわれる人たちが増加しています。

恐ろしいことにその年齢は、六〇歳前後までのぼり、社会人になつて四〇年近く自宅に引きこもつてゐる人たちも多いのです。家族と同居しているにも関わらず、孤立して会話も挨拶もないという「ひとり」も増加しています。このような人が自宅の自室で亡くなり、親が気づくまで一週間以上かかったという事例を何度も見てきました。

「ひとり」の生き方を認めたうえで

先にも触れたように時代とともに変わってきた生活スタイルは、人間の自由と利便性の追求によつて起こることで仕方のないことです。

しかし、この自由の追求によつて煩わしさや不便に耐えられず、自分に都合のよい生き方を選択してしまうと、人間関係や協調性の大切さに気付かなくなつてしまふのです。さらに、これによつて若者の未婚者の増加に拍車がかかっているのも事実なのです。一度、

送つてしまつた人間は、他人に気を使うことを煩わしいものだと認識してしまい、ひとりのさびしさと引き換えにしてでも気楽なひとり住まいを選択してしまうのは仕方のないところです。

もちろん、すべての若者がそうではありませんが、全体の流れが逆流して、以前のように協調性の保たた生活スタイルに戻つていくことは考えられません。

今後「ひとり」の生活を求める若者は間違いないなく増加し、その数がある一定の割合に達した時、「ひとり」の生活がスタンダードになるのです。高度成長期からバブルを体験してきた、世界一の超快適国家の日本で暮らしてきた私たちの今までの考え方では想像できなかつた時代へ突入するのです。

全国から講演のご依頼を受け年間に五〇カ所以上の地域でお話をさせていただいていますが、その聴講者のほとんどが高齢者です。実際にこのよだな時代をつくつてしまつたのは、わたしたち以上の年長者の責任ですよね、とお話をさせていただくことも多いのですが、ほとんどの方が「確かにそうかもしれないね、わたしたちは幸せに過ごせたけれど、若者には申し訳ないことになつてしまつた」などとおっしゃいます。

できるだけ「ひとり」の生き方を認めたうえで、若者を見守り、助言する責任があるので